

ヤスパーズの哲学思想Ⅱ －包括者思想と哲学的論理－

伊 藤 明 房

愛知教育大学 昭和50年卒

はじめに

ヤスパーズは、包括者の思想を哲学の根本思想と呼ぶ。⁽¹⁾『実存哲学』（“Existenzphilosophi”, 1938）⁽²⁾においては、「そのつど我々にとって存在であるものが我々にその内で出会うところの、包括者の最も広い空間という意味における存在へ間」（註⁽²⁾ 32頁）を提起する。そこでは、包括者とは、「存在そのもの」で「名乗り出るもの」であり、「決して対象とはならないもの」であると同時に、「すべての事物が、……見える通りのものであるばかりでなく、……透明のままでありうるところのもの」とされている。^{34—35頁}

これはいかなることを表しているのであろうか。包括者の存在とは、私たちにとって何を意味するのか。本稿は、私たちの現実と包括者の存在との関連を捉えながら⁽³⁾、ヤスパーズにおける哲学的論理について考察する。

1 包括者の諸様態

『実存哲学』では「私であり、また我々であるところの包括者は意識一般（思惟する意識）」、「存在そのものが現象するところの包括者は世界」、「現存〔現存在：以下この語を使用する〕（意識が担われている）」、また「現実的に精神として……これの諸々の観念的総体性の中へ、意識により思惟されたもの、並びに現存在として現実的なものがすべて収容されうる」としている。^(38—39頁) 包括者は、私たちである 現存在、意識一般、精神、私たちにとって対象となるものとしての世界という内在を包摂しているものである。そして、実際には「内在からの飛躍」、すなわち「世界から神性への飛躍と、意識された精神の現存在から実存への飛躍」が人間によって遂行される^(39頁) のである。⁽⁴⁾

包括者の諸様態は、『実存哲学』に先立つ『理性と実存』（“Vernunft und Existenz”, 1935）⁽⁵⁾において思索されはじめたものであるが、ここでは「哲学的根本知もしくは包越者〔本稿は包括者の語を使用する〕の諸様態の哲学」（『哲学とは何か』⁽⁶⁾所収）による概括をもとに考察していく。

(1) この世に存在していることの根本経験

私は、私の環境界に現存在している。私は思惟しながら存在している。私によって産出される世界である想像力の世界が生じるが、その場合の私は精神である。これら三つの根源からなる全体が世界である。私は私の自由を自覚しており、この自由において可能的実存として私に到来する……（略）……自由をもっている私を私に贈与するような力が、つまり超越者が確信されてくる。（註⁽⁶⁾ 284頁）

このような根本経験は、「私は私自身によって存在するのではなく、自分で自分を創造したわけではないのである」（同上）という、ヤスパースの主著『哲学』（全3巻）における実存の＜歴史性＞を表すものである。そして、「包括者に関する根本知を確認することは、・・・・・根本経験の形式」であって「実際に各人の内面で充実される」ことがなければ、根本経験は現実のものとならないのである。（同²⁸⁵頁）

以下に包括者の諸様態を示す。

現存在：世界の中での生体験として、現実的実在である。衝迫、衝動、欲求であって、幸福を欲し、幸福を獲得しようとする戦いの不安定状態におかれている。

意識一般：体験的現実的な意識のなかの、万人に共通の意識である。普遍的なものと普遍妥当的なものとを对象的に捉える一なる主観性である。他のあらゆる人の代理しうのような自我点である。知的理解の機能（思惟可能性一般という形式）として、われわれが構成したものである。人間の意識はその根源を言語と共有しており、言語と結びあったものである。

精神：はたらきの主体は想像力である。もろもろの形象を構想し意味豊かな世界の諸形態を作品として現実化する。秩序づけ限界づけ基準づけるはたらきをするような総括的全体者の力（完結したものとする）である。包括的な現実態—芸術作品と詩（閉鎖的になった無限なるもの）、職業や国家の建設や諸科学（無限に前進する開かれたもの）、この全体的なものは理念⁽⁸⁾と呼ばれる。

実存：自己存在の根拠、そこから私が私に立ち現われてくる秘匿された根拠。おのれを産み出してゆく自由、私が私自身であることができ他の自己とともに交わりのなかで私自身になることができるということを可能の実存と呼ぶ。客体とはなりえず、科学の対象とはなりえない。事実上かくあるというあり方の存在であるのではなく、存在可能である。（私は自分を所有しているのではなく、私は私へと到達するのである。）実存としての私は、存在するか否かという選択を決断する真剣さのうちにのみ存在する。

世界と超越者：存在それ自身である包括者、われわれのあり方によって包摂されている包括者である。われわれを産み出すものである。世界そのものは知の対象ではなく、研究のための課題としての理念である。超越者はすべての包括者の包括者である他者である。

これら根本経験の諸様態は、私たちの現実的経験として捉えなくてはならない。ヤスパースの言う内面の充実とは、経験による内面の充実であり、それは私たちの存在経験⁽⁹⁾であると考えられる。

まず、現存在が現実的存在として生体験するということは、私たちが身体的に発達すること、その結果としての様々な行動・態度を指している。そこに見られる衝動や欲求は、＜情動的発達＞⁽¹⁰⁾により喜・怒・哀・楽の感情表出となっているのである。身体反応として表出される快・不快の情動から発達したもので感覚的なものである。同時に言語が発生してきて事物について理解し、会話ができるようになっていく。共通意識としての主観性の枠組み（自我点）である自我が、はっきりしてくるのである。

意識一般は、私たちの知的理解の機能である思惟可能性で、認知能力を指している。さらに、言語による想像力が発現し、自我は現実と想像を同一視することがあるが、これは、

具体的な思考であって抽象的思考へと発達していくものである。ここにはすでに精神機能が存在しており、私たちは身体的発達にともない感情的生活から精神的生活へと成長していくのである。

観念的総体性として精神は、想像力により意味豊かな諸形態を創造する全体的な力であり、秩序づけ基準づけて社会や文化を創り出しているものである。社会の秩序や基準は、多くのものが限界づけられた禁止の体制で成り立っている。そのため、親や大人から話してもらって行為の意図を知ったり、仲間の言動に影響されたりするなかで他人の意図が違ふことを見つれたり、他者とのふれあいから他者意識をもつことで私たちの自我意識は確立していくといえる。この点で私たち（人間）は社会的存在である。

ヤスパースは、『哲学』（Ⅱ実存開明）⁽¹¹⁾において「自我諸相Ichaspekte」として、自己意識の「事実的なものとしての・・・・・・対象化（私の可能性の現実化した現象）」した「自我図式Ichschemata」を示している。

- a 身体我：肉体的現存在（身体）として生命力との統一である。私は自らの生命を欲する（愛する）。
- b 社会我：社会的現存在という社会的立場（権利・義務、役割）における歴史的な特殊体、社会生活において私だとみなしているものである。社会生活は社会的状態の変化と交際する人々の変化とに依拠している。
- c 作業我：作業するものによって業績意識をもつ。成果や作品を相対的に私のものとして承認する。
- d 回想我：私が体験したもの、私が見たもの、私が為し考えたもの、人が私に附与したもの、人に助けてもらったこと、これらすべてが回想のうちに、現在の自我意識を規定している。しかし、私は過去からの解放を企てたり、過去をそうでありたい図式に構成したりできる（現在から未来へ回想の意味と意義を発展させたり萎縮させたり、本来の誠実さから意味を変更することもできるということ）。

これらの図式を社会的存在としての自我意識という視点でみると、自我は「社会我」と「回想我」の相をもつといえる。私たちは身体我を基盤とした社会我をもつ現存在であり、その内に精神的な業績我をもつのである。回想我は記憶によるもので、回想されるものとして記憶には経験や知識などが保存されている。⁽¹²⁾

また、ヤスパースは「私がまた一つの『そのような存在』として与えられていることは私の根源的経験の一つである」と性格について述べている。（註⁽¹¹⁾ 56-57頁）「そのような存在」とは「すべての私の現象の根底にあるもの」として推論した私の存在—社会生活のうちで行為することにより現象する「私が私自身においてある存在」である。性格を所与態として私の存在自体、「経験的に私の素質」（同⁸⁰頁）と捉えるのである。私の素質は「私の身体性」、つまり「身体の形態、その大いさ、力、運動様式」にしたがい「状況や病気や性別や年齢などを通して経験する」（同⁴⁷頁）ことのうちに現れる性向である。

自我意識は、こうした性格をもつ「相対的に固定した存在者」としての現存在に関わることで「『私自身』」という私の能動的意識」（同⁵⁸⁻⁵⁹頁）として確立するといえる。

つぎのように言われる。

「私はそれと争うことによって自由に意欲されたものに変化させ、そのうちで私自身を発

展させ、それを私の責めとして引き受ける。」(同⁸¹頁)これは「肉体的現存在を、……耐えしのびかつ抑制しなくてはならない」という「自己意識の根本構造」(同⁴⁹頁)、すなわち「自我一般の構造」であり、「私がそのうちにある形式としての制約」(同⁴⁵頁)を表している。しかし、まだ可能性として、私自身を確信するようになっていく途上にいるのである。

こうして自我意識は、「客観的となった自我存立に対して私自身が……同時に自由として存続する」という「対象的となった私から自由としての私への飛躍」(同⁵⁹頁)により、自己存在の根拠である実存(本来的自己存在)を確信することになるのである。

(2) 根源を異にしたものの諸関係

ヤスパーズは「すべての様態相互の関係と互いの相互貫徹のあり方は多層的な関係」であり、「包括者の諸様態は、それら相互の緊張関係のなかでわれわれが事実上生きているような根本現実」であると述べる。(註⁽⁶⁾ 297-298頁) 1節での議論によれば、私たちの根本現実は以下になるであろう。

生体験する現存在には、身体的発達にともない感情が表れ、言語の発達によって自我が現れる。自我は意識一般という主観性の枠組みとして、そこに言語による思惟可能性としての認知能力が発達する。同時に想像力が生まれ、観念的総体性としての精神機能が発達する。私たちは、社会(家庭)や文化のなかで自我意識を確立させ、感情的・精神的生をしているのである。

『真理について』(Von der Wahrheit, 1947) (13)では、「第一部 包括者の存在 第三章 包括者の諸様態の相互関係」において詳述されている。

そこでは、「われわれは現存在と意識一般と精神であり、しかも共通の生成として……相互に入り込んでこれら三者」であって、意識一般は「包括者の関節」、「探究可能になるところの現存在」、「内実においてそれ自身透明であるような現実性であるところの精神」と言われる。精神の透明であるような現実性とは、一般にいうところの心であろう。ヤスパーズは、これら三者を一つに結びつけているものは分離して「実在化」、「知性化」、「心霊化」されねばならないとし、知性と心は「現存在の生命性に結びつけられ」ており、「活動的な在り方のエネルギー」という性質をもつとしている。現存在の「力と高まりゆく能力との感情」と表現される(271-272頁)これらを自我意識は感受するのであるが、知性は現存在を対象として客観化する。「実在化」、「心霊化」とは、対象として意識に「現象すること」(267-270頁)を表している。

意識一般という包括者は、そのなかに存在が現象するという意味で現存在と精神とを区分するのである。それゆえ、「包括者の関節」と言われるのは、三者を結びつけているもの、われわれであるところの包括者そのものを指示することができるということであろう。指示するものは、自我意識(私)である。「現実的であるものは、意識のなかでわれわれにとっての現象となる。」「意識とは、主観と客観への分裂という根本現象である」とヤスパーズは述べる。(註⁽⁶⁾ 266頁)そして、「現象の場となるようなものを、われわれは包括者と名づける」と言うのである。

自我意識というのは、対象を指示することで客観化し認知しており、そこに思考作用がはたらいっている一なる主観性である。ヤスパーズは、「われわれ人間は、もろもろの対象を思念しながらその対象に対して意識をもつ」(同上)とする。自我意識(私)は思惟する私であり、思念というのは内言(ヴィゴツキー) (14)による内部表現と捉えることができるであろう。

したがって、観念的総体性といわれる精神は、想像力によって形象を構想する内部表現であるといえる。内部表現という精神性(いわゆる心)は、私たちの全体的なものを示しており、存在

が現象する場〈包括者〉となっている。それは、自我意識〈私〉の意思といってよいと思う。

自我意識は、また〈私〉の意思という思念するそのものを指示することができる。すなわち、私自身であるところの自己存在を思惟することができるのである。ヤスパースは、「対象化することは、それが己れ自身を思惟することができるという点に、・・・・・・思惟の実現のなかでそれ自身の思惟に対して開顕せられるという点に、包括的な関連としてその特別のあり方をもっている」(266頁)と叙述しているが、自己存在の根拠である実存を思惟するということは、可能の実存のシェーマ(ザーナー)⁽¹⁵⁾を確認することであるといえる。

しかし、つぎのようにも言う。「われわれがそれであるところの包括者のすべての様態は、われわれの現存在のうちにとり入れられ」、「われわれは実存であると同時に現存在であるが、・・・・(略)・・・・現存在からの分裂性のうちにありながら現存在のなかで己れを現象へともたらし、また、この現存在を引き受けることにおいて現存在と一体となる」(269・267頁)。ここで言われることは、現存在は世界の中で生体験しているから、存在するものが現存在に客観化されて現象しており、現存在へと現象し一体化した実存は、意識一般に存在者(世界存在)として現象するということである。彼は「自らを現象へともたすこと」を実存する一実存的開示と呼んでいる(註⁽¹¹⁾)。

このように「自らに対して一現象することは、われわれ自身による能動的な遂行という」(273頁)ことであるから、実存とは私自身である「自由としての私」を指す言葉⁽¹⁶⁾である。ゆえに、自由への飛躍と言われることは、自我意識〈私〉が自由を自覚するということであろう。ヤスパースは、つぎのようにまとめる。「われわれが、そこにおいてまたそれによって現に存在するものが世界である。われわれが、そこにおいてまたそれによってわれわれ自身であり自由であるところのものは、超越者である。」(220頁)

また、「われわれ自身が本来的にはそれであるところの包括者一実存と理性一は、両極のように向かい合っている」と「理性」について述べる。「実存は理性の原動力であるし、理性は実存の覚醒者である。」「一者へと・・・・押し迫ることとして、理性は、一者と結びあわされている実存そのものである。」(268頁)

ヤスパースの言わんとすることは、私たちは世界のうちに生きている経験的現存在として、自己存在の自由を自覚したとき超越者(一者)を感得するということ、実存と一体化している「理性」は超越者へと迫るものであるということである。では、「理性」はどのように捉えられているのかを見ていこう。

2 われわれである包括者の紐帯としての理性

ヤスパースは、理性は「一者に至ろうとする意志」で「一切のものを結合する紐帯を見いだすようにたえずわれわれを動かすもの」であり、「われわれ人間にあつては、包括者のすべての様態の紐帯たる理性によって包括される」としている。(註⁽⁶⁾ 291頁)

「理性は、包括者のすべての様態のうちにあるものとして時間のなかで・・・・生成」するのであるが、「現存している永遠なものという形で己れを見いだそうとする」。したがって、「理性の衝動」とか「理性の空間」などと言われ、「ここ理性の包括者の内には、それに到達することが哲学的思考の課題であるような運動の空間がある」とされる。そこに「実体的なものは何もないような局面」なのである。(同²⁹²⁻²⁹⁴頁) ヤスパースは、理性という永遠性の空間を求めることが哲学することであると考えているのである。

『真理について』「第一部 第二章 包括者の諸様態の開明 C われわれの内なるすべての包括者の様態の紐帯・理性」において叙述される（232-250頁）、理性性は以下のである。

理性の根本態度：理性は、存在する一切と存在しうる一切とについて制限のない聞きとること。身を開いて自らを関係させるはたらき（開放性と問う可能性）。

＜全体的な交わりへの意志＞

すべての諸根源を可能にすること：諸様態の間で生じるような戦いの真正さを可能にする。実存の真理を可能にする。

理性の根本特徴：＜統一への意志＞

総括し回想し前進せしめる力：たえざる不満を表現する（限界のそれぞれを踏み越える）。＜超克していき可能にしていく否定性＞

一者の引力の下で可能性の自由な空間へと進み入る。存在者の閉鎖的内在からの飛躍を通じて現実的である。

包括者のすべての様態における思惟の優位：すべての限界をのりこえ、すべてに現前して要請する思惟である。

ここから分かるヤスパースの考える包括者の紐帯としての理性とは、「実存の意志」である。というのは、自ら問いを發し（総括・回想）可能性へ前進しようとする（開放性）ことは、ある志向性を示しているからである。それが一者の引力、「一者に至ろうとする意志＜統一への意志＞」であり、一切の存在を聞きとろうとする＜交わりへの意志＞である。彼は、「解放されていて他者に対して開かれてあり続けるところのそのこと〔本来的存在〕に関する知が、われわれの内面にやはりどれほど決定的に存在するかということ、このことは、・・・（略）・・・硬直化した固定性を排棄するための条件」（242頁）であると言う。私たちが一者（超越者）を自覚することができるかどうかということが、存在者の閉鎖的内在からの飛躍を可能にするのであり、このことが、真の不満に対する解答であろう。

そうならば、自我意識（私）の思惟は、一なる真理を問うことになる。実存の真理を可能にするのである。『実存哲学』註⁽²⁾においてヤスパースは、「その出会う存在への通路という意味における真理への問」のなかで「一なる真理への問」（67-72頁）を立てている。

彼は、真理は包括者の諸様態における真理意味であるとする。この諸様態の間で生じるような戦いというのは、「一つの真理意味を孤立化する」という一つの真理意味を絶対化することによる真理の争いのことである。自我意識（私）が、一つの様態を優位としているのである。このことは「意識することに閉じ籠らせようとする」、「我々の現実の根本状況である」と表現されている。私たちがこの根本状況から一なる真理へと進むには、「包括者の様態の統一を実現する諸々の極端な限界形態を直視する時」、時間現存在として全体的な一つの「歴史的形態」に近づきうるとされる。「根源の真理である例外」と「包括的真理である権威」（73-88頁）とである。

例外については、「あらゆる可能的実存に偏在するもの」で「歴史性そのものが例外であること・・・（略）・・・を内包しているからである。実存の真理は、一般者のすべての様態の形態を貫いていつも例外であるという性格をもっている。」と叙述する。したがって、＜歴史性＞が実存の真理ということになる。

権威は「私を担うものの充実、庇護するもの、そして慰撫するもの」であるが、「絶えざる緊張の内に、また緊張による運動の内にある」とされる。それは、固定と突破の間の運動のうちにあり、「権威の内では自由になる」という自由との間の運動でもある。私たちは、権威を「伝承しうる実質」をもった「畏敬」の対象として成熟する。「個別者は権威の内から出て育つのである。」これが人間の学びの状態（教育）⁽¹⁷⁾であろう。こうして、自我意識＜私＞が自由を自覚するとき、成熟した自立した人間と成ることができるのである。自立した人間にとって、包括的真理である権威は「彼の内心においては、彼の自己存在を通して語る超越者である」ことになる。ヤスパースは、「真の権威の本質」について叙述している。⁽¹⁸⁾

このように例外と権威を前にして、自由への飛躍（突破）が為されることになるが、一なる真理を問う自我意識＜私＞の思惟というのは、哲学する思惟であろう。「理性」と称される実存の意志が思惟を為すのである。「哲学的真理の道—は理性と称ばれる」（⁸⁸頁）とヤスパースは述べるが、哲学する思惟は、意識一般の思惟以上のものであることを表している。よって「可能性の自由な空間」と言ってもよく、閉鎖的内在から超越者へと結合するものである＞（『真理について』第一部 第二章 C a）と言えるのである。

筆者は、理性は実存という私自身の思念が、ヤスパースの言うところの一者（神性）を目指す意志と考えるものであるが、彼は「理性の運動は・・・思惟そのものを遂行しはしないのであって、・・・思惟の方が、理性の運動を前提としているのである」と哲学的思考の課題であるというのである。⁽¹⁹⁾

哲学することについては、つぎのように考えている。（^{31・32}頁）

「それは現実の探求を内的行為としての思惟により遂行する」、「思惟が現実そのものの経験に成るところを目指して、思惟しながら押し進む・・・（略）・・・先駆し準備する思惟の途上に私は思惟より以上のものを経験する」、「この思惟の方法的な客観化が哲学である」と。ここに見られるヤスパースの哲学することは、理性の運動であって『真理について』（第一部 第二章 C i）において、つぎのように述べられることである。

「哲学する途上で己れ自身の内で己れを開明しながら、理性は哲学的論理学を展開する。」

続く

註

- (1) 草薙正夫訳『哲学への道』以文社、1980年、53頁。註⁽⁵⁾ 307頁，註⁽⁶⁾ 265頁
- (2) 鈴木三郎訳『実存哲学』〔ヤスパース選集Ⅰ〕理想社、1972年
- (3) 「もう少しこれらの諸相の内的的連関というか、これを特に私たち「人間の経験の諸相」として捉え、この過程を「実存の現象学」として詳らかにする必要があると考えている。そうでないと、包括者論と我々の現実とがいつこうに重なり合ってこない。」福井一光「論理と体験と—ヤスパースの包括者論をめぐって—」、『理想 第671号』理想社、2003年、8頁。この見解を参考にしている。
- (4) 『哲学』Ⅲ巻において、超越の諸相が展開されている。「世界定位（Weltorientierung）（第一巻）」「実存開明（Existenzerhellung）（第二巻）」「形而上学（Metaphysik）（第三巻）」

- (5) 草薙正夫訳『理性と実存』世界の大思想Ⅱ－12，河出書房新社，1971年
- (6) 林田新二訳『哲学とは何か』白水社，1978年
- (7) 拙論「ヤスパースの哲学思想－実存の歴史性と交わり」，『哲学と教育』62号，愛知教育大学哲学会，2014年，参照
- (8) 「閉ざされたものとしての理念は精神の本来的な理念（ヘーゲルの理念）であり、開かれたものとしての理念は理性の理念（カントの理念）である。」，註⁽⁶⁾ 272-273頁 前者は完結性と完結可能性としての理念、後者は閉ざされることなく広い場面に押し入ってゆく課題、と説明されている。
- (9) 「ヤスパースの包括者論は、単に論理学的要請乃至存在論的根拠とばかり考えられたものなのではないのであり、……あくまでも現実性に根差した人間の存在経験の深まりによるものなのである。」前掲，「論理と体験と－ヤスパースの包括者論をめぐって－」，13頁を参照した。
- (10) 波多野完治『子どもの発達心理』，第一章 発達概念，参照
- (11) 小倉志祥・林田新二・渡辺二郎訳『哲学』中公クラシックスW66中央公論新社，46-55頁
- (12) 澤口俊之『HQ論：人間性の脳科学』，海鳴社，2005年，287頁．結晶性知能，参照
- (13) 林田新二訳『真理について 1』〔ヤスパース選集31〕理想社，1976年
- (14) 「内言は、自分への言語である。外言は、他人への言語である。」「内言は、やはり言語であり、コトバと結びついた思想である。」「思想の背後には情動的・意志的傾向がある。」ヴィゴツキー，柴田義松訳『思考と言語 下』明治図書，1972年，第7章 思想とコトバ 三 内言と自己中心的言語，六 思想および意欲とコトバ，参照
- (15) 「実存開明は、範疇ではなく、しるし、指標である諸概念において、現実的実存の模写といったものにあらざる、単に思惟において構成された《実存》であるところの可能的実存のシェーマを考えるのである。」 ハンス・ザーナー，重田英世訳『ヤスパース』理想社，1973年，122頁
- (16) 「実存は自由なくして存在しない。……自由において、実存はみずからの根拠をもつ。」前掲，『ヤスパース』，127頁．以下参照
- (17) 「信仰された権威はまずさし当り、純正な、本質そのものに的中する教育の唯一の源泉である。」前掲，『実存哲学』，79頁．「人間存在は単に遺伝によるだけでなく、むしろ伝統によってはじめて存在する。」前掲，『理性と実存』，314頁
- (18) 「権威は歴史的現実における真理の統一の謎が形態化したものである。包括者のあらゆる様態に発する真理が世界内の権力と、……人間的位階－これらの真理を担い、またこの権力をもつところの－の高さと合同すること、これが真の権威の本質である。」前掲，『実存哲学』，82頁．真の権威には、人格の陶冶が必要である。
- (19) 「理性とはなんであるかを遂行し、……それ故に知ることは、以前からかつまた永久に、本来的に哲学的な課題である。」前掲，『実存哲学』，89頁